

Title	ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン : 理性の瘤・ことばの輝き・ことばの限界
Author(s)	Pörtner, Peter
Citation	大阪外国語大学学報. 58 p.35-p.45
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80904">https://hdl.handle.net/11094/80904</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン— 理性の瘤・ことばの輝き・ことばの限界

ペーター・ペルトナー

Ludwig Wittgenstein - Die Beulen des Verstandes.  
Das Glänzen der Sprache. Die Grenzen der Sprache.

Peter Pörtlner

Der vorliegende Text ist die überarbeitete, japanische Fassung eines Vortrags gleichen Titels, den der Autor am 27. März 1982 am Goethe-Institut Kyoto hielt. Der Text möchte gelesen werden als eine Einladung zu Wittgenstein: Der erste Teil bietet neben einer biographischen Skizze auch einige unvorgreifliche Bemerkungen zu einem möglichen "Psychogramm" des 'merkwürdigen' Menschen Wittgenstein: Hinweise auf seine Liebe zur Musik, sein plastisch - architektonisches Vermögen, seine Beziehung zum Geld, zur Natur...

Im zweiten Teil werden die grundlegenden Argumente und Konzepte des Früh- und Spätwerks Wittgensteins vorgestellt (repräsentiert jeweils durch den 'Tractatus' und die 'Philosophischen Untersuchungen'). Angezielt wird dabei weniger eine Einführung in 'noch eine Philosophie' als eine Verunsicherung des Lesers, die im besten Fall dazu führen könnte, daß er, was er schon einmal dachte: noch einmal - unter neuen Vorzeichen gleichsam - überdenkt (was ihm nicht wenige Überraschungen bereiten wird!).

Der dritte Teil leitet uns dann wieder mehr ins 'Atmosphärische' zurück. Hier wird - freilich sehr knapp und verkürzt - versucht, durch eine Art Rekonstruktion einer Wittgensteinschen Vorlesungsstunde dem Leser nahezu bringen, wie Probleme nur durch eine Veränderung der Fragestellung plötzlich in ein 'ganz anderes Licht geraten', hinfällig werden - oder sich gar lösen (lassen).

Wittgenstein, ein geradezu unerbittlicher Außenseiter, der trotz seines fast manischen Asketismus' von beispielhafter Sensibilität war.

## I

今日、ここで、ある「メルクヴェルディヒ」な人物について、雑考を述べる機会を得たことを、有り難く思っております。

「メルクヴェルディヒ」というのは、少くとも3つの意味を含んでいます。

そのひとつはドイツ語のメルクヴェルディヒということばの文字通りの意味であって、「注目に値する」という意味であります。（これは日本語の「興味深い」に当たります。）

2つ目は、我々の日常的な期待と予想を越え、裏切る、という意味での「オモシロサ」であります。そういう意味での「オモシロサ」は、不可思議な領域で起こるといえます。日本語の語彙では、この領域は、「珍らしい」と「奇妙」とに「囲まれて」います。

第三の意味での「オモシロサ」は、第二の意味のそののちょうど裏返し、「影武者」であります。これは、我々の日常的な期待と予想を満足させ、笑わせます。

この下らない喜びを指して、ヴィルヘルム・ブッシュは、次のようなユーモラスな句を作りました。

ああ、よかった、よかった。

ありがたや、オレだけは違う。

要するに、この第三の意味での「オモシロサ」は、「カワッタ」と「キチガイ」との間の「緩衝帯」に当たります。

ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインという人物は、少くとも上に述べたような3つの意味に於いて、メルクヴェルディヒであったのです。

この私の講演のタイトルも、変わっているではありませんか……しかし、ヴィトゲンシュタインの書物に詳しい方々は、もうとっくにこのタイトルが『哲学研究』から取り出した、アフォリズムを敷衍したものであることに気が付かれたことでしょう。

そのアフォリズムで彼は、哲学的な問題があるという事実を、哲学的な問題は、言語の境界にぶつかった「理性のコブ」にすぎないと主張することによって、あざ笑っています。

しばしば、ヴィトゲンシュタインはもっときつい言い方をして、哲学的、心理学的、美学的な概念を指して、「ナンセンス」という言葉を使いますが、時々、もっと彼らしい表現も出てきます。彼のことばでは、「ナンセンス」と「文法的な冗談」とは同義語であります。ヴィトゲンシュタインにとってはハイデガーの哲学は巨大な「文法的な冗談」に過ぎないと言っても良いくらいです。もし、ヴィトゲンシュタインに、「ハイデガーの哲学を、どう思われますか」と尋ねるとすればその返事はきっと、「私には、ハイデガーは何を言いたいのか判りません」というものに違いありません。もし、彼が生き返って、学者が『ヴィトゲンシュタインとハイデガー』というタイトルを持つ本を出したということが、彼の耳に入ったら、絶望するかもしれません。けれども、絶望するよりも、彼が、豚肉のペーストを買って西部劇の映画を見に行く方が、ありそうで、より彼らしいことであります。（映画館に行かないとすれば、推理小説を読んだり、哲学雑誌の知性的な破産と不能を茶化したりすることでしょう。）

ひょっとしたら、コレだったのではないですか。

冷たい豚肉のペーストと「文法的な冗談」。

数か月前、今度の連続講演の準備の会合のとき、私は、すぐにヴィトゲンシュタインについて発表することを決心しました。しかしその時、家に帰って、私の心に疑いの念が生じたのです。自分で、何故、ヴィトゲンシュタインを選んだのかわからなかったのです。というのも、私はドイツ語を教えている日本学者として、哲学への「越境」を犯してはならないと思ったからです。しかし、なぜ諦めなかったかという、私には急に、ヴィトゲンシュタインを、専門家に対して、守らなければならないし、弁護しなければならない、と「悟った」からです。彼が、いろいろな面であやまちを犯したということを知っている専門家たちからこそ、彼を守らなければなりません。ここでは、彼が、哲学、論理学で、時代の先端をいったかどうかは問題ではないからです。

……彼は決して時代の先端をいった訳ではありません。——大げさな意味ではなく、彼は、非時代的人間、時代に対抗した人だったのです。しかもその食客になることなく、彼は常に社会に対して良心の苛責のようなものを持っていたように思えます。ひょっとしたら、自分自身を幸福すぎると感じた為かもしれません。そこで彼は、第二次大戦で病人の世話をしたように、自分の貸りを返そうとしました。

ヴィトゲンシュタインを、どの分野に数えるか、という事も簡単ではありません。哲学者として、カントではなかったし、言語学者としてソシュールやチョムスキーでもなく、論理学者としてもゲーデルではなかったのです。しかし、その混合物として彼は非常に、独特であります。しかし、その混合物の品質について、おしゃべりを始める前に、まず、何はともあれ、始めましょう。

ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインは1898年、オーストラリアの富裕な家に生まれます。ヴィトゲンシュタイン家は、サロンの雰囲気がありました。オーストリア版、トマス・マンといったところです。審美主義と商業主義が、固い同盟を結んだ時代でした。晩年のブラームスも、この家に、頻繁に出入りしました。ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン自身も、一生涯、自分の本当の才能は音楽の領域にある、と思い、自分の天職は指揮者であると確信していました。従って、ケンブリッジ大学の、心理学研究室で、音楽のリズムについての実験をしました。晩年まで、彼は、友人に、交響曲全曲を、口笛で吹いて聞かせ、その際には楽器編成を説明する為にのみ、中断しました。とりわけベートーベンの『第八』が好きでした。『第八』といえば、一楽章中ずっとメトロノームが、チックタックと鳴る『ダンス交響曲』であります。いわゆる『英雄』の『第三』ではなく、いわゆる『運命』の『第五』でもなく、表向きには「歓喜に酔いしれた」『第九』でもなく、「田園的」で甘い『第六』でもなかった。そうではなく、ベートーベンの交響曲の中でも、最も、「音楽的」で、音楽以外の何物をも目的としない、専門家のジャルゴンという「絶対音楽」に近い、『第八』だったのです。これは、非常に特徴的で、又ヴィトゲンシュタイン

的であると思います。彼が1番愛読した文学作品も、音楽を賛美しています。メーリケの『プラークへの旅の日のモーツァルト』にヴィトゲンシュタインは、短いが、優れた解釈を残しています。ヴィーゲンシュタインは、アウスグレンツェン：（理解できないことを、理解を乱させないように遠ざけること）を自らの使命としていました。別のいい方をすれば、不可能であることはそのままにしておくべきだ、と思っていました。ヘルダーリンの言葉を貸りれば、「目のまゑにあるものに名をつけよ。」ということです。ところが、時折、止むを得ず、あり得ないことでも、出現して、「目のまゑ」に現われることがあります。そういう現象を、シュテルンシュトウンデ（星の時）と、昔の人は名付けました。そういう出来事存在理由は、それが存在することのみあるのです。メーリケのこの小説の中では、彼はセンチメンタルではなく、普段は情熱的ともいえるほどに排斥ししていたものに出合ったようです。

何に出会ったのか、といえば、それは大げさな意味ではなく、素朴な意味で神秘的な物です。「論考」によれば、そういう意味での神秘的なものは、どのように世界が存在するか、という問題ではなく、世界が存在する、という事実に基づくものであります。しかし、「どのように世界が存在するか」という問題は、忍耐とエネルギーを費すことで、測り知ることができましょう。しかし、「世界が存在する」という事実は、奇妙で取り扱いにくいものであります。芸術のみが、この事実と、親密な関係を持ち、それを自由に行動させます。——これに対して哲学は、それについて欺瞞的になる危険があります。

しかし、音楽のみがヴィトゲンシュタインの領分ではありませんでした。

彼が友人のアトリエで、突然そこにあった1片の大理石を彫り始めた、という逸話が伝えられています。その成果である頭像の習作は「ギリシア的な美」に満ちたものだった、と、ある伝記は伝えています。広い意味での彼の造型的才能を、最も明白に証明するものとして、彼が20年代に姉の為に設計し、建設を監督した家があります。その家は、今日なお、機能的建築の模範的な例として、バウハウスの先駆としての名誉を分かちふさわしいものと見られています。よく考えてみると、ヴィトゲンシュタインの、音楽的、文学的、造型的、論理的、哲学的等々の関心はすべて、建築という概念に統合されるものである、といえましょう。（舞踏は、運動建築、音楽では音響空間という言葉が用いられ、哲学者は、学問体系をうちたてるのです）

ともかく、『論考』の最初の文を思い出しましょう。

世界とは、その場に起こることのすべてである。

これは、少し先取りして言うと、世界は事物の全体ではなく、<sup>ダイング</sup>事実の全体である、という意味です。事実は、その時々<sup>ファクトウム</sup>の組み合わせに応じて、多様な世界を構成することができるので、世界は事物の全体と一致し得ないのです。

更にヴィトゲンシュタインは、世界は、事実によって規定されており、しかもその事実がすべての存在する事実でなければならないと説明しました。彼の世界は、まとまりのある世界であり、「穴」はありません。だから、この世界の内側には、（たとえば、箱の中に何かが入っている、というふうには、）何物かを含むことができないのです。

論理的な空間の中の事実は、世界そのものである。

しかし、急いではいけません。我々の論拠はヴィトゲンシュタイン家のサロン会話のようになっています。若いルードヴィヒはまず学校に行かなければなりません。機械と数学が彼を魅了しました。それらを勉強し、飛行機のエンジンを製作したりする間に、知らず知らずのうちに、最初の哲学的構想が生まれました。当時、彼が1番愛読したのは、シューペンハウアーの書物でした。高等学校を出てから、彼は、バートランド・ラッセルの指導の下で数学を勉強する為に英国へ行きます。ラッセルと初めて会ったとき、ヴィトゲンシュタインは、自分は、パイロットか哲学者か、どちらになれば良いか教えてほしい、と言いました。ラッセルは、パイロットになることを思いとどまらせました。こうしてヴィトゲンシュタインはラッセルの下で、論理学と哲学の研究を始めました。後にイエーナ大学へ転学し、フレーゲの下で更に論理学の研究をつづけました。卒業の後、第一次世界大戦まで、彼は、ノルウェーの、自分で建てた丸太小屋で過しました。戦争の勃発後、東部戦線とイタリアで兵役に服しました。戦場でも彼は、いつも『プロト・トラクタトゥス』を携えていました。皮肉なことに、この書物は、後方地帯と補給収容所で、最終的に仕上げられました。

「論考」の完成によって、彼は、すべての哲学的問題は解かれた、と確信しました。その結果として、彼は哲学することをやめる決心をしました。ヴィトゲンシュタインは、オーストリアのある村の小学校で教師として教え始めたのです。第一次大戦の始まったとき、すでに彼の莫大な遺産を寄付してしまいました：困窮している芸術家に、分け譲る為に、ザルツブルグの表現主義雑誌「ブレンナー」の編集者、ルードヴィヒ・フォン・フィッカーに、すべての遺産を渡してしまったのです。ゲオルグ・トラークルやリルケは、その中から、かなりの額を受け取っています。ところが、トラークルは、そのお金を使う前に、亡くなってしまいました。ヴィトゲンシュタインから寄附されたお金が、そのままトラークルの遺産になりました。ヴィトゲンシュタインはリルケから、感動にあふれた感謝の手紙を受け取りましたが、どうしてよいかわからず、気分を害されて、フォン・フィッカーに返事をするように、その手紙を渡してしまいました。というのは、彼は一当然のことながら一感謝は期待していなかったからです。彼の考え方からすれば、1度お金を寄附してしまえば、そのお金とはもう何の関わりもないからです。（リルケの詩は、彼にとってずっと疎遠なものでした。トラークルの詩については、「私には意味は判らないが美しい詩である。」と述べています）

もちろん、哲学を断念することは、それほど易しくはなかったようです。

村の学校の教師であった時は、ヴィトゲンシュタインの一生の間で、最も不幸で辛い時代であって、その時代の唯一の喜びは、生徒達に、童話を読んで聞かせることであったと述べています。彼は自殺をよく考えました。

ここでも彼は、彼らしい逃げ道を見つけました。手紙にも書いているように、「自殺はきたないのだ」と認識したのです。私にはヴァレリーのことが非常に、これに近いものに思われます。「絶対的幸福者にのみ、自殺することが許されている」……

小学校の勤めをやめてから、彼は1年間修道院で庭師として働きました。

決定的転機は、思いがけず、外からの衝動がもたらしました。ウィーンでは「ウィーン学団」という名の論理学者のサークルが形成され、その集団の「論考」解釈は、ヴィトゲンシュタインを、あまり喜ばせなかったのであります。彼は誤解されたと感じ、自分のみが、自分の哲学を弁護することができると考え、再び哲学を始めました。

1929年は、彼が最終的に、哲学へ戻った年です。ヴィトゲンシュタインはフェローとしてロンドンのトリニティー・カレッジへ行きます。ここで、ヴィトゲンシュタインの後期の哲学が始まります。1930年から彼は、ケンブリッジ大学で、定期的に講義するようになりました。（正式には彼は、大学教授の資格を持っていなかったので、ケンブリッジ大学は、後から「論考」を博士論文と認めました。1939年になってようやく正教授の資格が与えられました）

こういう任用の事情と同じ程、彼の生活と講義のスタイルは、珍らしかったのです。

彼が暮らしていた部屋には、ベッドが1つ、机と椅子が1組あるだけでした。そして、彼が自分の原稿を保存していた、鍵のかかる金属製の箱がありました。火災恐怖症の為だったのでしょいか。自分の著者を広める為には何もしなかったにも拘らず、それを守る為、努力しました。「彼は、講義で疲れると、映画館へ西部劇を見に行った」と学生の1人が伝えています。映画ではいつも最前列に座り、冷たい豚肉のペーストを食べました。こういう風に、映画で息抜きをしているときに、誰かがじゃまをすると、彼は非常におこったそうです。同僚の教授達の評判もあまりよくなかったようです。彼が、悪名高きノーネクタイ族の1人であったこともその原因であったかもしれません。（推し測るに、教授食堂へ入れてもらえなかったので、豚肉のペーストを食べることにしたのかもしれません。いつもノーネクタイで、同じ革のジャケットを何年も着いて、……）

1935年には、ケンブリッジでの生活を中断して、ソ連へ行きました。ソ連に永住したかったらしいのですが、スターリンの政治に不満を抱き、まず約1年、ノルウェーの丸太小屋で暮らし、第二の代表作『哲学研究』の仕事を始めました。

1937年について英国へ戻り、1938年ドイツのオーストリア併合を機会に、英国の国籍を取得しました。この時期にヴィトゲンシュタインは、美学、心理学、宗教についての、比較的少ない講義を行いました。講義の出席者のノートが1966年に、初めて出版されました。第二次大戦が始まると同時に彼は正教授の資格を得ました。しかし彼が正教授として働いたのは1945年から1947年

までです。戦時中、彼は——すでに述べたように——病院で働きました。

1947年、いつも「生きている死」として嫌っていた教授職を彼は放棄します。彼はアイルランドへ赴き、小さな漁村で暮し、特にその鳥を馴らす才能で漁夫達の間で、有名になりました。

1949年は、アメリカに友人を訪ねて短い間滞在しました。この頃、ガンであることがわかりましたが、1951年4月29日の死まで、2年間、仕事を続けました。彼がこの最後の期間に書き上げた作品は、1969年に初めて『確かさについて』という題で公表されました。

## II

ここまでは、ヴィトゲンシュタインの哲学について、それが、「建築学のような側面」を持つ、ということ述べたのみですが、これは、あまりに乏しく、厳格な意味での哲学的論拠ということからは、かけ離れたものであります。

皆さんが、がっかりなさらないよう、又あまり多くの哲学的な話に苦しめないように、「論考」の論述の基本的アウトラインを述べ、後期哲学の『哲学研究』に代表されるような、基本的特色を説明し、その後、再び雰囲気的な話に戻って、G. E. ムーアの報告に基づき、1930年から33年までのヴィトゲンシュタインの講義を復元してみたいと思います。

『論考』は、長さからすると——約2万語——半日で読める書物です。けれども、その透明なスタイルにもかかわらず、何年も、繰り返し、「挑戦」しなければならない程の、考える材料を含んでいます。

『論考』は、よくあるように、章に分れておらず、1部は1つの文章にすぎないパラグラフの連続で成り立っており、その文体は簡潔で、圧縮された箇所が少なくありません。余分なものはぶいてしまっているので、その意味は理解され得るギリギリのところであり、同時に——あるいはそれゆえに——その文体の美しさで有名であります。

ヴィトゲンシュタインの文体の透明さは彼をして、疑いなくドイツ語の最も優れた散文作家の1人としております。ドイツ語には、ある程度、「合っていない」ともいえるこの透明さは、ドイツ語の傾向に逆行するものであります。ある文学者は、ヴィトゲンシュタインのように透明な散文を書く為には、フランス語ならば、少々の才能で充分であろうが、ドイツ語でそれをするとなると、天才でなければならない、と述べています。

「論考」の大部分は、言語の本質と、言葉の世界との関係と扱っています。その中心は意味の模写論理であり、それは、言語は世界を模写している（Propositionen ひん辞）から成るということを主張しています。ひん辞は、思考の知覚できる表現であり、思考は事実の論理的模写であります。

決して比喩的な意味のみではなく、思考と賓辞は世界像でありますけれども、文字通り世界像であっても、言語は思考を認識できない程「変装」させてしまいます。それにも拘らず、模像が、絶対的に正しいというのではないとしても、像は、模写されたものと共通なところがなければなら



りません。この必要な極小の共通点をヴィトゲンシュタインは「論理的かたち」と名付けています。模写するものと、模写されたものが、この「論理的かたち」を分つ時のみ、これを模写と呼ぶことが論理的に許されます。日常的な言葉では、思考の「論理的かたち」は、隠され、乱されています。その根本的な理由のひとつは、我々が単純な言葉で複雑な対象を指し示すことにあります。たとえば、私たちは「車」と呼びます。しかしもし我々が、この「車」という言葉に隠されているすべての関係をいちいち数え上げるとすれば、それこそ、きりがありません。しかし、それを数え上げることこそが、我々の課題であります。完璧に分析されつくした命題というものは、極端に長い、叙述の組み合わせされた鎖のようなものでしょう。その叙述とは、単純な対象物のすべての名前を含みながら、単純な対象物の間の諸関係を、その名前で、——正しく、あるいは、正しくなく——模写しなければならないでしょう。

ところが、表現された叙述はすべて完璧に分析された叙述と同じ程に複雑であります。例えば、片足を一步前へ進めるという動作は極めて簡単なことに思えますが、生理学的に筋肉、神経などの働きから説明するとなると一筋縄ではいきません。

つまり、一方には、考えの最後（最小）の要素が、そしてもう一方には最後の原子の単位が、向かいあって存在するのです。大げさに言えば、その最後の原子の単位は世界の最後の実質に当ります。もちろんこの両側の最後のエレメントとそれの相互関係をどう認識したらいいのか、ということは、ヴィトゲンシュタインも、言い当てておりません。哲学者と形而上学者は、いわゆる「論理的かたち」それ自体を描写しようとしませんが、これは不可能です。模写するものは、模写されたことから、独立していなければならない、それはまちがっている可能性も許されていなければならない

従って、世界の「論理的かたち」の像は、存在することができません。何故かというとなすべての叙述は、自分自身この「論理的かたち」を持たなければならない、「論理的かたち」から独立していることは出来ません。

形而上学者が言おうとしていることは、実は、示されることしかできません。この意味に於て、哲学は様々の論理のセットであってはならず、（世界の「論理的かたち」を鏡の中の像のように写し出す）叙述を明らかにする活動でなければならない。もしそれが実現されても、「生」の問題、「神」の問題は、まだ解釈されていません。「何かがある」という事実は、見通せないままですし、そればかりではなくそれに対する問いも、未だに提起されていません。その限りにおいては、謎も存在しません。そのような問題は、問題自身が消え去ってしまうことによってのみ解釈され得るのです。

後期の哲学と同様、「論考」にすでに「我」の問題が登場しています。「我」が何処に存在しているのか、ということとは言えません。それは、「物事のコア」であると同時に、「除外」されてい

ます。この問題を説明する為に、ヴィトゲンシュタインは、見ている目の例をあげます：目によって見られたものから、それが目によって見られたのだ、ということ、結論することはできません。見ている瞬間、見られている物は、目の中に存在しないと同時に、外にも存在しないのです。この問題は、見られたものは、見ているものにどのように、知覚されているかという認識論の問題とは、明らかに違うものです。もちろん、ヴィトゲンシュタインは、この認識論の問題をもはっきり意識していましたが、ここでは、認識論の問題よりも、「所有」の問題が重要なのです。

この問題は、後に今いちど触れることをして、『論理哲学論考』と『哲学研究』の違いについて考えたいと思います。『論考』と同様、『研究』も、言語の問題に献げられています。ところが、『論考』が、言語の哲学を定義しようとしているのに対し、『研究』は意識の哲学に狙いを定めています。『論考』では、模写論理が中心であったのに対し、『研究』では、「言語ゲーム」という概念が、これに替っています。言語ゲームといっても、「スクラブル」を楽しむ、という意味ではありません。言語ゲームという概念は、大ざっぱな意味で言語に限らず、人間の行動を含んでいます。言葉は道具にすぎず、使用によって、自分との類似性を失なうこともあり得ます。（たとえば、くぎと打つ金槌と、人を殺す金槌は、だいぶ違います）つまり、機能の面では、それほど違っていても、言葉は、表面上は、非常に画一的であります。

「目が痛い」と言うこともできますし、

「神の目は汝を見る」とも言えます。

言葉は、外見上似ているので、我々はそれを名前であると思い、それを使って対象を指すことができますと考えます。そればかりではなく、対象を説明することができる、とさえ考えます。

ヴィトゲンシュタインは、そういう考え方はナンセンスだ、と判断します。言葉は、それが使われている言語ゲームのコンテキストの中で、解釈されねばなりません。それが、どういう風に、ある言葉を使っている存在のグループの行動、及びコミュニケーションを構成しているか、という局面から、考えられなければなりません。

そうすると、すべての名辞は、言語ゲームの中でのみしか機能しないということが判明します。これは、物質世界にも、精神世界にもあてはまりますが、精神世界は、目にみえないので、これに関する言語ゲームは、更になお解釈し難いものであります。自分の痛みに、プライベートな名前を与えたとしても、それを、正確に検査させるならば、その支えは失われてしまいます。ヴィトゲンシュタインは、あらゆる種類のプライベートな言語は、不可能だ、と頑固に主張しています。

コミュニケーション的言語ゲームに統合され、文明化されるまで、前言語的な叫びはナンセンスです。ここで、模写概念から彼が、どれほど離れたところにいるかが明らかになります。『論考』では、ねらいは原子と叙述の要素であったのに対して、『研究』では、言語ゲームに基づく生

活構造は、世界の「実質」に当たります。

記号は、ひとつひとつでは、生命のないもので、使用によって、息をし始めるのです。（記号が「息」をその中に秘めているのか、それとも使用がその「息」なのでしょう？）

ついでながら、ヴィトゲンシュタインの時代性はここにあります：言語を行動と考えるという点では、マルクス主義の学者までが、ヴィトゲンシュタインに同意しています。

### III

私が、再び『論考』と『研究』の間には、はっきりとした連続性がある、と主張したところで、私がここで述べることは、長さにおいて全く不十分であり、モド・バルバリコであります。ヴィトゲンシュタインは『研究』の中で一貫して、哲学は論理学であってはならず、我々を取りまく、言葉の罫に我々がつまづくことのないように警告を発する活動でなければならない、と主張しています。『論考』では、叙述を解き明かすとは、その隠された構造を明らかにすることを意味したのに対して、今や、叙述を言語ゲームのコンテキストの中で、どういう風に使われているのかと示すことになるのです。

ヴィトゲンシュタインの哲学に対する態度も同様に一貫しています。『論考』では彼は、哲学者達が、ある種の記号に意味を与えることを忘れていると主張し、『研究』では、彼らの記号が言語ゲームでは何の役割も引き受けることができないことを示しています。哲学は治療（セラピー）であるべきなのです。

さて、例の「雰囲気的なもの」に戻り、G. E. ムーアが我々に伝えてくれた報告を頼りに、30年代始めのある時の、ヴィトゲンシュタインの講義を再現してみましょう。「私は歯が痛い」と、「君、あるいは彼は歯が痛い」という叙述の差違が話題になっています。

ヴィトゲンシュタインは藤脚子に座っています。革のジャケットを着て、学生は、5、6人で小さな輪になっています。学生はみな彼が何を言い、それが互いにどう関連しているのか、を理解しかねています。ヴィトゲンシュタインの考え方には飛躍があり、彼は今考えている問題が、いかに難しいかを強調しています。何故かという、それは、観念論、リアリズム、ソリプシズムの交点を示しており、経験に即した叙述を、必然的に真であるもの、すなわちヴィトゲンシュタインが「同語反復的、文法的」ステートメントを名付けるものとを混合してはいけないと警告します。例えば、もし私が、「私はあなたの歯の痛みを感じられない」と言うと、それは（文法の問題であって）「あなたが痛みを感じたら、私の痛みではない」ということを意味します。同じように、「私はあなたの歯の痛みを感じられない」というのは、「あなたの歯の痛みを感じるのは、ナンセンスだ」という意味であります。これに対して、「私の声は、どこか目の近くから出る」という叙述は、全く違うものです。この叙述は必然的に見えるのみです。違った風にも、あり得る事実だにだまされないで下さい。目を持たず、身体を持たなくても、見ることはできるかもしれま

せん。見ることは、身体の目の関係の経験から教えられた事実にはすぎません。少しも必然性はないのです。「あなたの目」という表現は一体何を意味するのでしょうか？その意味は、肉体の目でもなく、視野でもないのです。「あなたの目」は、「視野の目」であります……

「彼は歯が痛い」と言う時、彼の歯の痛みは彼の行動に当るの対し、自分の歯の痛みについて話せば、それは自分の行動についての判断ではないのですか？どうでしょうか？

他人の痛みと私の痛みとは、同じ意味での痛みでしょうか。明らかなのは、ただひとつ、「彼は歯が痛い」ということを証明する基準と、「私は歯が痛い」ということを証明する基準は根本的に違うということです。従ってこの2つの叙述の意味も違わなければなりません。「彼に何かの感じがする」ことの証明と、「私に何かの感じがする」ことの証明さえ根本的に違います。何故かという、「私は歯が痛いということが、どうしてわかるのか」という質問をするのはナンセンスですから、この質問に、うわべだけ答える、「感じるから」という返事も助けてはくれません。それは同語反復にすぎないからです。「調べたから」という返事も、何か、調べることができるものがある、ということを前提とします。

ところが、そういう考えは、ナンセンスです。「彼は歯が痛い」と「私は歯が痛い」との文法的レベルは違うのです。「彼は歯が痛い、痛くないか、知らない」と言えますが、「私は歯が痛い、痛くないか知らない」というのは、不条理な叙述であります。

「歯が痛い」ということは直接経験で、その所有者はありません。目がある程度、見られたものに「参加」しないのと同じように、「歯が<sup>ベルグ</sup>的いこと」に個人の考えは「参加」しません。「私は考える」より、「私は考えられる」と言った方が良いのです。「我」という言葉はその所有者を指し示すことができないので、「私のからだは私のものである」ということも、証明できません。

「我」と、他の主語を指す言葉との機能は大きく異なっています。「私はマッチ箱を持っている」か、「私は虫歯を持っている」と、「スキナーは、マッチ箱を持っている」と「スキナーは虫歯を持っている」という場合に、主語の叙述的な機能は同じですが、「私は歯が痛い」というときの「私」は別のものです。

私の現在の経験のみが唯一の真理です。これも不条理な表現ですが、非常に重要なことです。我々の言語から取り出された表現にすぎないのです。事実でないことに反対することだけしか、現実を性格づけることはできません。ヴィトゲンシュタインの言葉を借りれば、「我々は像に、とらえられている。出ることはできない。何故かという、この像は、我々の言語の一部であって、言語はこの像を、我々に無慈悲にも繰り返させる。」

皆さんが、頭が混乱していらっしゃり、よくお判りにならないとしたら、私は満足で、成功しました。何故かと言いますと、その場合には、あなた方には私の状況が伝染したのですから。

(註) この論文は昭和57年3月27日、京都ドイツ文化センターで行われた講演を多少の変更を加えて翻訳したものです。翻訳の際に手を借して下さった大阪外国語大学の同僚に感謝いたします。